連載・植物の不思議を訪ねる旅

第16回

植物画成立の系譜

東京大学・法政大学名誉教授
長田　敏行

我々は植物画というと牧野富太郎博士の図を思い浮かべるのが多いのではないだろうか。そこには写実性に基づく表現があるが，芸術的な香りも漂っていることが特徴である。その集積が牧野植物図鑑であり，描かれている図から植物学的特徴を知ることができ，普段これを特に意識しないで利用している。これらの描かれた植物画が，単純な写真より優れていることが読み取れることは，改めて述べる必要はないであろう。

加藤竹斎「扁額（へんがく）」

これらの植物画が日本でどのように成立したかは，あまり研究の対象になっていないことに気付いたことが，この話題について追跡する動機となったが，私はそれをふとしたきっかけで探るヒントを得た。2011 年 2 月 12 日に，友人のクレーン (Sir Peter Crane) 教授から，彼が準備中の「イチョウ」に関する本（Crane 2013）のドラフトが届き，私にイチョウ精子発見前後の小石川植物園の様子を尋ねてこられた。私もイチョウの本（長田　2014）を準備していることを知っておられたからである。その未だ最終稿には半分にも達しない原稿の中にイギリス王立キュー植物園蔵のイチョウの図（これは当時，扁額とよばれていたことが後に分かったので，以後は扁額とする）（図 -1）があった。その説明によると，明治 11 年（1878 年）に加藤竹斎により制作されたことは，その扁額の裏面にある篆刻印により明らかである。しかしながら，それ以外には何のために，いかにして制作されたかは全く知られていないとあった。私はその扁額図を見た時，東京大学小石川植物園蔵の未公開の原画を下に描いていることに気付いたので，小石川植物園にないはずがなかろうということで探索を依頼した。果たして，見つけることができたが，それらは昔よく見かけたお茶箱に 1964 年頃の新聞紙に包まれてあり，全部で 25 枚あった。聞いてみると，以前からその存在は知られていたが，何であるかはわからず，長年人々を悩ましてきたということであった。それをきっかけに，世界 5 か所にあわせて 220 枚あることが判明したが，その制作の目的，過程はなお不明であった。

ところが，2011 年 3 月 8 日の早朝，前夜からの読み止しのモース（Morse 1917）の著名な「Japan Day by Day（邦訳名　日本その日その日）」が枕頭にあったが，そこに開かれていたページに絵入り（図 -2）で制作目的が書かれているではないか。実に，1917 年刊行の著名な本に回答の一つがあったのであり，人々はその存在に全く気付かなかったことになる。そこには，「この扁額は植物学の教育材料として大変優れたものである」と書かれていた。この日は東日本大震災の 3 日前であったことは，その印象を一層強くして私に残ることとなった。また，制作プロセスは，丁度そのころ読み下しされ，解読が進められて刊行されつつあった伊藤圭介日記（伊藤　2010）に如実に書かれていた。従って，主要な疑問はほとんど解決された。伊藤圭介（図 -3）は，1877 年に創設された東京大学において，彼のみその職にあった員外教授という肩書を持ち，就任時既に 75 歳であり，植物研究のみに従い，教育は担当しなかった。これらの経緯は，世界 5 か所の情報と併せて論文として発表した（Nagata *et al* 2013a）。その限りでは「加藤竹斎の扁額の再発見」として区切りがつき，それで仕事は収斂するはずであった。ところが，さらなる展開を見ることになり，それが表記の「植物画

図 -1　イチョウ扁額
イギリス王立キュー植物園蔵のイチョウ扁額 (Nagata *et al*. 2013a)

図 -2　Japan Day by Day に登場している扁額 (Nagata *et al*. 2013a)

図 -3　伊藤圭介
モース著「Japan Day by Day」に描かれた伊藤圭介のポートレート (Morse 1917)

図 -4　キリ扁額
ハーバート大学植物標本館蔵のキリ扁額 (Nagata 2013b)

図 -5　シーボルト「日本植物誌」のキリ
シーボルト「日本植物誌」に掲載されているキリ図 (Nagata 2013b)

図 -6　川原慶賀のキリ
ロシア　セント・ペテルスベルク　コマルフ植物研究所蔵の川原慶賀作のキリ図 (Nagata 2013b)

成立の系譜」となった所以である。

モース旧蔵の「扁額」

2013 年 9 月 12 日には，偶々共同研究の用務があってイェール大学クレーン教授のもとに滞在していたが，イグ・ノーベル化学賞が戴けるということで，アムトラックに乗ってニュー・ヘブンからボストンへ赴き，ハーバート大学へ向かった。授賞式は午後遅くということであるので，昼前後にかけてハーバート大学植物標本館にある 8 枚の加藤竹斎扁額を見せてもらうこととした。イェール大学から同行の共同研究者デュヴァル（A. DuVal）さんとともに，標本館でシュムール（M. Schmull）博士から扁額を見せていただいた。それは，上記モースの個人蔵のもので，モースが日本から持ち帰ったものは大部分がピーボディー博物館にあり，美術品はボストン美術館にあるが，それとは別な扱いで，彼が終生手元に置いていたものであるとのことであった。没後，遺族が大学へ寄贈したという由来があることを知ったが，その一枚「キリ」の扁額（図 -4）を見たとき，我々は有名な図を思い浮かべることになった。それは，前々回紹介したシーボルト (Philipp Franz von Siebold) の「日本植物誌」に載っているキリ (*Paulownia tomentosa*) の図（図 -5）である。模写したものではなく，「日本植物誌」の図を元に改変したものであった。植物画の特徴である，写実性が基本であるが，構造的な特徴をも表したものであり，茎の横断を示し，種子の付き方も示されていた。ここに至って，我々は狩野派絵師として出発した加藤竹斎が，徳川幕府の崩壊により本来の職を失い，新政府に仕え，文部省で教育用絵画を描き，後に東京大学小石川植物園の画工となったのであり，西洋画法を導入して，植物画を描くようになっていったことが見て取れる。我々の見た扁額は，まさにその産物なのである。そこから更に，日本における植物が成立の流れを辿れることに気づいた (Nagata *et al*, 2013b)。

植物画成立の流れ

まず，シーボルトの日本植物誌のキリの原画（図 -4）は，川原慶賀によりなされている。その原画は，シーボルトの没後，遺族により幕末から明治初期に函館で活動したマキシモヴィチッチ（R. Maximowicz）が関与して，ロシア王室へ売却され，現在セント・ペテルブルクのコマルフ植物学研究所にあることが知られている。川原慶賀とは，「沈 南頻」風の写実画に長けていたことにより，長崎出島のオランダ商館に出入りを許されていたが，出島へ来たシーボルトは彼の腕を見込んで，膨大な画業を依頼したので，「シーボルトの眼」といわれるようになっていった。シーボルトは更に，フィラニューフェ (C.H. de Villeneuve) をオランダよりよんで，より正統的な西洋画法を慶賀に習わせしめ，多量の動植物画，風俗画を描くこととなった。その結果，オランダ ライデンの国立民族博物館を始めとして，ドイツ，ロシアに彼の作品は多量にある。私もライデンの民族博物館を訪問したことがあるが，その量に圧倒された。ところが，そのように彼の作品は国外には多量にあるのに，我国にあるものは極めて限定されており，そのほとんどがお絵像という肖像画であることで，あまり知られている存在ではなかった。1990 年前後から，オランダなどからもたらされた作品の展示会があって，やっと知られるようになった。彼がシーボルト事件に連座して罪を問われたこともその知名度の低さに関連しているかもしれない（兼重　2003）。

かくして，シーボルト，フィラニューフェ，川原慶賀の画業と加藤竹斎制作の扁額とは関連付けることができるようになったが，これで私は日本植物画法成立の一つの流れを辿ることができたという思いに至った。この流れは，従来の西洋画法は，司馬江漢，平賀源内，小田野直武，渡邊崋山と続く流れとは独立していることを改めて認識した。

文献

Crane, P. 2013. Ginkgo − Plant that time forgot. Yale Univ. Press.
伊藤圭介 2010. 伊藤圭介日記，16 巻，名古屋東山植物園 .
兼重 護 2003. シーボルトと町絵師慶賀 . 長崎新聞社 .
Morse, E.S. 1917. Japan Day by Day. Houghton Milflin Co.
長田敏行 2014. イチョウの自然誌と文化史，裳華房 .
Nagata, T. *et al*. 2013a. Economic Botany 69, 87-97.
Nagata, T. *et al*. 2013b. Curtis's Bot. Mag. 20, 261-274.